

医療系学生を対象とした英語講読クラスにおける 文学教材の可能性

—— *Tuesdays with Morrie* (1997) を教材として ——

鶴生川恵美子

群馬県立県民健康科学大学

目的：医療系学生を対象とした英語講読クラスにおける医療をテーマとした小説の教材としての有用性を，疑似体験に焦点を当てて検証する。

方法：医療をテーマとした小説 *Tuesdays with Morrie* (1997) を教材とし，自作のワークシートを使用して授業を行なった。疑似体験の場としての文学への認識，医療者にとっての疑似体験の必要性等に関して，授業前・後に実施したアンケートから，学生の意識変化を分析し，医療をテーマとした小説の教材としての有用性を確認する。

結果：医療者としての人生経験の必要性，それを補完するための疑似体験の重要性，文学による疑似体験獲得の可能性に関して，履修学生は高い意識を備えていたが，本授業を通じてさらに高められた。

結論：医療をテーマとした小説を教材とした授業は，学生の医療者としての疑似体験の必要性に対する意識向上の一助となった。学生のこれらの意識の維持，および向上のために，さらに文学教材の活用方法を改善することが今後の課題である。

キーワード：医療系学生，文学，英語講読クラス，疑似体験

1. はじめに

英語を専門としない医療系学生を対象とした英語教育において，その教授法はたびたび議論的になっている。1960年代に始まった専門分野に特化したトピックを扱う ESP (English for Special Purposes) は，英米やオーストラリアを中心に発展を遂げ，遅ればせながら日本においてもようやく認知されるに至った。1970年代には，学習者が将来外国語を使う目的や状況に合わせ，ニーズに合った形で行われるべきであるという方向に変わり，医療系学生のための英語教育では，医療英語や医療会話などが ESP 教育の一環として主流となっているといっ

しかし，医療系学生が将来向き合うのは「人」とであるという観点からすれば，教養課程における英語教育においては，必ずしも医療英語や医療会話など実用面重視の英語教育に終始することなく，豊かな人間性を追求することをも含めた英語教育を考慮する必要性も見逃せないのではないだろうか。医療系学生にとって，専門的な知識の習得と同様，患者への対応の重要性を認識することも必須であり，教養課程の英語教育が，その一翼を担うことも可能であると考え

本論では，先ず，2013年度英語講読（英語Ⅳ）において実施した，文学作品を教材とした実践授業について報告する。次に，授業前・後に実施されたアンケート結果に基づき，医療をテーマとし

た小説を読むことによる疑似体験に対する学生の意識変化に焦点を当てて、医療系学生を対象とした EFL クラスにおける、医療をテーマとした小説の教材としての有用性を検証する。

そうすることによって、本研究が、語学教育において優れた教材であるとの認識が顕在しながらも、難解であると敬遠されがちな文学作品²⁾の、医療系学生を対象とした EFL (English as a Foreign Language) クラスにおける、その意義と可能性を見出す契機となることを明示し、今後さらなる積極的な文学導入への提言とするものである。

まず、本論の目的をより明確にするために、現在の医療系学生対象とした英語教育の傾向、英語教育における文学教材の現状、さらに、英米における看護教育での文学活用に関して俯瞰することにより、医療系学生対象の英語教育における文学教材の有用性に着眼するに至った研究背景を提示したい。

2. 研究背景

2.1 EFL クラスにおける文学教材

英語教育は文学教育という認識だった明治時代、西洋をモデルとした近代化のもとで立身栄達の通行手形は英語であり、英語力の指標は文学の原書が読めることであった³⁾。1929年度の英語教科書のうち70%が文学教材であった⁴⁾にもかかわらず、大学入試に共通一次試験が課されるようになった1979年頃には、大学入試問題としての適性を考慮した場合、文学は問題にしにくい難解な教材として見なされ、文学を教材とする傾向は徐々に希薄化の一途をたどることになっていった⁵⁾。

しかし、日本において、使える英語を習得するための英語教育から文学教材が消滅しつつあった1980年代になって、英米では、それまで軽視されていた文学作品が外国語教育における教材として再考されるようになった⁶⁾。1990年代から日本で

も、すでに1980年代からイギリスにおいて研究されている文学テキストを英語教育に用いる方法論を踏まえて、理念的な形で提示されていたという⁷⁾。近年では、文学は、疑似的感情経験を提供することによって、共感力 (empathy) 育成に貢献する可能性を秘めたものであるとする Ghosn⁸⁾の考え方を基盤とし、英語の技能を高めることに加え、感情移入と思考力向上を目的とした授業研究⁹⁾なども行われている。

このように、EFL クラスにおける文学教材は、語学習得に加え、文化的側面への関心、登場人物への深い理解力や洞察力を高めることにより、感情的な反応を喚起させ、ひいては学習者個々の成長を促す、優れた教材として期待されているといえる¹⁰⁻¹²⁾。

2.2 英米の医学・看護教育における文学導入

米国の医学教育では、1970年代から文学を導入したプログラムが取り入れられ、1982年にジョンズ・ホプキンス大学から *Literature and Medicine* という学術雑誌が刊行されるに至った。また、英国の医学雑誌 *The Lancet* に、1996年から97年にかけて9回にわたり連載された *Literature and Medicine* では、実践報告を示しながら、医学教育における文学の重要性が強調されている¹³⁾。これらの動向は、医療者や将来医療者を目指す学生への「合理性を追求する科学教育」に対する懸念¹⁴⁾から始まり、人間性を滋養するための教育としての Medical Humanities (医療人文学) 教育の重要性へと高まっていった¹⁵⁾。さらには、人間の価値問題を考える教育として、リベラルアーツ (教養) 教育における人文科目として注目されるに至っている¹⁶⁾。

一方、米国の看護教育では、1960年代から文学作品が教材として導入され、その後、英国でも文学を取り入れた看護教育が行われている¹⁷⁾。英米の看護教育における文学導入の背景には、専門知

識や最先端の技術重視による人間性への視点の希薄化が挙げられ¹⁸⁾, 文学や芸術を通じて, 実際の人間が生きた経験に対する学生の理解や考え方を深めていくことに価値を求めたアプローチとして Nursing Humanities という考えが打ち出されるようになった¹⁹⁾. さらに, 文学を読むことによる疑似体験 (vicarious experience) が看護学生の患者に対する態度の変化をもたらすことを明らかにした研究²⁰⁾を始めとして, 現実を模倣し, 非現実の状況にながらも情緒的な反応をもたらす力を持った文学などの芸術が, 直接体験することができない様々な状況を疑似体験する機会を提供し, それらの疑似体験を通じて, 共感力, 感受性 (sensitivity), 洞察力 (insight) 等を高める手助けとなることを示した研究も数多くみられる²¹⁾.

2.3 ESP 教育における文学

ESP は言語教育の主流が文学であることに対する反動が次第に高まりつつあった1960年代に, 学習者の目的や現実に応じたコースを工夫し, 教授法を考えるとというより実用的な観点が主張されたことに始まった²²⁾. しかし, ESP 教育の日本における浸透度は低く, ESP 教員が増えたり, 研究が特に進んでいるというわけでもない²³⁾. ESP 教育の一つとして行われている「医療・看護英語」に準ずる授業を一部でも取り入れている看護系大学は, 医学部と同様に 8 割を占めているにもかかわらず²⁴⁾, 看護師の英語使用状況の調査では, ほとんど使用しない人が 8 割を占めている²⁵⁾というのが現実である. 実際の必要度と使用頻度の不一致の原因の一つとして, 現実を離れた必要性に対する意識の肥大化があげられている²⁶⁾.

そうなると, 医療を学ぶ学生に提供される英語教育がかならずしも, 実用的な医療英語に集約されるのではなく, 文学系教材を活用して実用系専門分野にアプローチする方が, より効果的であり²⁷⁾, 医療や看護に関連した現代的課題を扱った

小説や演劇を教材化し, それぞれの専門分野に特化した文学系 ESP を実践することも可能²⁸⁾とする言説も, 説得力を帯びてくる.

さらに, Hirvela, A.は, ESP と Literature との関連性について言及しながら, ESP 教育における文学の再評価を行った. 授業で SF 小説を使った事例を具体的に示し, LSP (Literature for Special Purposes) を提言している²⁹⁾. Hirvela が述べているように, 注意深い作品の選択, ESP の目的に沿った適切な応用によって, 文学は医療系学生の EFL クラスにおいても十分な教材としての有用性を示す³⁰⁾といえる.

これらの動向や言説から, 医療系学生を対象とした EFL クラスにおける文学作品は, 語学学習において多様な要素を備えた有用な教材であることに加え, 疑似体験の場を提供し, 将来向き合うことになる様々なバックグラウンドを持った患者との対応に不可欠な感性, 共感力, 洞察力等の向上に一翼を担えると考えられる.

3. 文学作品を教材とした英語授業の実践報告

3.1 対象クラス

対象クラスは, 2013年度前期 (2013年 4 月～7 月) と後期 (2013年10月～2014年 1 月) に実施された選択科目, 英語Ⅳ (Reading) の 2 クラスである. 履修学生数の内訳は表 1 に示したとおりである. (表 1)

表 1 クラスと履修学生数

	前期クラス (2 学年)	後期クラス (1, 2 学年)
看護学科	19	14 (8)
診療放射線学科	3	13 (8)
合 計	22	27 (16)

注: () 内は 1 学年の学生数

3.2 教材：Tuesdays with Morrie (1997)

(『モーリー先生との火曜日』)³¹⁾

英語講読授業における教材の選定は、考慮すべき重要な点のひとつである。Collie & Slater によれば、教材選定においては、学生の必要性、興味、文化的背景、言語能力が基本的な基準となるが、考慮すべき主要素は、作品が学習者の興味や前向きな反応を引き出し、個人的成長を刺激することができるか否かにあるとしている³²⁾。

そこで、医療系学生にとって、彼らの興味や必要性にあった専門分野に関連した医療をテーマとした小説 *Tuesdays with Morrie* を教材として選択した。教材となった原書は、大学生にふさわしい言語レベル（講談社文庫版では TOEIC 470～レベルと記載されている）³³⁾ で書かれており、また、専門分野に関連した医療関連の用語や病気に関する知識の習得も可能である点、ESP 的観点からの教育も可能である。

Tuesdays with Morrie は Mitch Albom によって書かれた事実に基づいた小説である。著者であり、主人公でもあるミッチ (Mitch) は、大学の恩師であるモーリー先生 (Professor Morrie) が ALS (amyotrophic lateral sclerosis：筋萎縮性側索硬化症) という難病に侵され、余命いくばくもないことを、あるテレビ番組で知る。素直にお見舞いに行けずためらいの日々を過ごした後、ミッチは恩師モーリー先生との16年ぶりの再会を果たす。その後14回にわたる火曜日の訪問ごとに、モーリーは「ろうそくのように溶けていく」と表現された病気の身体を押して、人生にかかわる様々なテーマ、愛、許し、文化、家族、結婚、老い、死について、まるでミッチが大学在学中の時の授業のように語る。死を迎えるまでのモーリー先生の自宅への14回に及ぶ訪問が、名誉や欲にまみれた多忙な生活を送るミッチに、人間らしく生きることの大切さを気づかせてくれるのである。

3.3 授業内容

授業では、原書 *Tuesdays with Morrie* をテキストとし、2名の担当教員によって作成されたワークシートを補助教材とした。原書 *Tuesdays with Morrie* の全27章のうち7章を選択し、各章に対してワークシートを作成した。ワークシートは履修学生に事前配布し、予習をする際に活用するように指導した。

英語 IV において行われた15回分の授業計画は、表2に示した通りである。(表2)

表2 シラバス

回	授業内容と扱った章
1	授業内容の説明と DVD 前半部の鑑賞
2	<i>The Curriculum</i> 「カリキュラム」
3～4	<i>The Syllabus</i> 「授業概要」
5	<i>The Student</i> 「学生」
6～7	<i>The Orientation</i> 「オリエンテーション」
8	中間テストと DVD 後半部の鑑賞
9～10	<i>The First Tuesday, We Talk about the World</i> 「最初の火曜日」
11～12	<i>The Second Tuesday, We Talk about Feeling Sorry for Yourself</i> 「第2の火曜日」
13～14	<i>The Third Tuesday～The Thirteenth Tuesday</i> 「第3の火曜日」から「第13の火曜日」プレゼンテーション
15	<i>The Fourteenth Tuesday, We Say Good-bye</i> 「第14の火曜日」

注：日本語題名は別宮貞徳氏翻訳による『モーリー先生との火曜日』³⁴⁾を参考にした。

第1回目の授業では、授業についての説明、及び使用する文学作品をもとにした映画 (DVD) の前半部を鑑賞した。DVD は原書を理解するための補助教材として使用した。第2回～第7回、第9回～12回、第15回の授業では、事前に作成されたワークシートをもとに各章を読み進めていった。第13回と第14回の授業では、ミッチがモーリーを訪問した14回の火曜日のうち、残りの「第3の火曜日」から「第13の火曜日」までの章に関して、2～3人の小グループによるプレゼンテーション活動を取り入れた。各々のグループは各1章を担当し、1) 内容把握として、モーリーがミッチ及

び読者に伝えたかったことについての印象深い例文を添えて説明する、2) 重要語彙に関して例文を添えて説明する、の2点について発表した。中盤の第8回の授業では、中間テスト（語彙や文法事項に関してワークシートから出題）を実施し、その後DVDの後半部を鑑賞した。

3.4 ワークシート

Collie & Slater は、著書の中で、文学作品を教材とする授業におけるワークシート作成の重要性について言及している³⁵⁾。彼らが示唆したように、科目担当者によって作成されたワークシートは、EFL クラスにおいて文学作品が与える3つの役割である1) 'cultural enrichment' 2) 'language enrichment' 3) 'personal involvement' の要素に基づき、文化および言語面での豊かな知識の獲得と自己成長を目標として作成された。

ワークシートの4つのセクションについて、学習者が行う課題を示すととも、特に疑似体験の場を提供し、学生の意識変化に影響を及ぼすと考えられる1) 'Reading Comprehension' と4) 'Activity' の2項目について、より詳細な説明を加えた。

1) Reading Comprehension

Q & A 方式（資料1-1）やチャート作成（資料1-2）などを通じて、本文の内容把握をする。

指導者は、事前に自主学習した内容についてのペアによる確認を促した。その後、ワークシートを完成させながら、本文の内容に関する補足説明や、比喩表現など意味が難解な英文に関する説明を加えた。

例えば、モーリーがALSと診断される前とその後の様子について書かれた章 *The Syllabus*（「授業概要」）を扱った第3回～第4回の授業では、モーリーの病歴とともに、その際彼が感じたことを本文から読み取り日本語で要約をしてもらった。同時に、学習者自身による感想を記入し、

チャートを完成させるよう促した。

2) Grammar & Phrases

本文の内容を把握する際に理解が比較的困難と思われる文章や、重要な文法事項を含む英文を、文法事項や語句に注意しながら訳出をする。（資料1-3）

3) Vocabulary

本文で使われている重要と思われる単語について確認をする。（資料1-4）

4) Activity

モーリー先生が語った言葉やメッセージに関するペアによる意見交換やディスカッション活動、および医療用語に関するリサーチ活動を行う。（資料1-5）

指導者は、例えば、モーリーがALSと診断された章を扱った第3回～第4回の授業では、ALSについてのリサーチ活動を取り入れた。さらに、学習者に、ALSについて説明している箇所を原書から抜き出し、和訳をしてもらった。ALSという病気について、リサーチによって得られた専門用語による説明と原書において描写されたALSについての表現の相違、及び委縮していく身体をろうそくに例えた描写から感じ取られる患者の複雑な気持ちに注目するよう促した。

4. アンケート実施

4.1 調査対象者

前期クラスでは授業前・後ともに、22名全員による回答(100%)、後期クラスは、授業前アンケートでは、27名中21名(77.8%)、授業後アンケートでは、27名中16名(59.3%)の回答を得た。全体では、授業前アンケートでは、49名中43名(87.8%)、授業後アンケートでは、49名中38名(77.6%)の回答を得た。

4.2 アンケートによる調査内容

質問項目は普段の読書習慣（小説）（Q1）、小

表3 アンケート結果：前期・後期クラス（pre：n=43 post：n=38）

質問項目	5		4		3		2		1	
	Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post
Q 1 あなたは普段小説を読む。	2 (4.7)	4 (10.5)	13 (30.2)	8 (21.1)	9 (20.9)	7 (18.4)	12 (27.9)	11 (28.9)	7 (16.3)	8 (21.1)
Q 2 あなたは、小説を読むとき、登場人物に感情移入しやすい。	8 (18.6)	10 (26.3)	17 (39.5)	17 (44.7)	8 (18.6)	8 (21.1)	7 (16.3)	0 (0)	3 (7.0)	3 (7.9)
Q 3 小説を読むことは医療従事者には必要なことだと思う。	5 (11.6)	6 (15.8)	16 (37.2)	17 (44.7)	16 (37.2)	9 (23.7)	6 (14.0)	4 (10.5)	0 (0)	1 (2.6)
Q 4 小説以外に絵画や音楽に親しむことも医療従事者には必要なことだと思う。	7 (16.3)	11 (28.9)	24 (55.8)	17 (44.7)	8 (18.6)	6 (15.8)	4 (9.3)	3 (7.9)	0 (0)	1 (2.6)
Q 5 患者の気持ちをよりよくわかるようになるためには多くの人生経験は必要だと思う。	33 (76.7)	29 (76.3)	10 (23.3)	9 (23.7)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
Q 6 小説による疑似体験でも多くの経験は得られると思う。	9 (20.9)	11 (28.9)	23 (53.5)	21 (55.3)	10 (23.3)	6 (15.8)	1 (2.3)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
Q 7 疑似体験による経験でも、将来患者の気持ちを理解し、うまく対応できるようになるために必要なことだと思う。	13 (30.2)	13 (34.2)	22 (51.2)	20 (52.6)	7 (16.3)	4 (10.5)	1 (2.3)	1 (2.6)	0 (0)	0 (0)

注1：5：非常に当てはまる 4：当てはまる 3：どちらとも言えない 2：あまり当てはまらない 1：全く当てはまらない
注2：Pre は授業前 Post は授業後を示す。
注3：（ ）内はパーセンテージを示す。

説を読む際の感情移入に関する認識(Q 2)，小説及びその他の芸術の必要性への認識(Q 3・Q 4)，医療者にとっての人生経験の必要性への認識(Q 5)，小説による疑似体験獲得の可能性への認識(Q 6)，医療者にとっての疑似体験の必要性への認識(Q 7)の7項目である。Q 1からQ 7の各項目について、5段階尺度、1（全く当てはまらない）2（あまり当てはまらない）3（どちらとも言えない）4（当てはまる）5（非常に当てはまる）のいずれかを選択してもらうアンケートを1回目の授業開始時（Pre-test）と15回目の最終授業後（Post-test）に実施した。

4.3 倫理的配慮

本研究は群馬県立県民健康科学大学倫理委員会による承認を得て実施されたものである。英語Ⅳの履修生に研究の趣旨について説明し、さらに、①自由記述のアンケートに際しては自由意思であること、②その際、研究協力に不同意であっても単位認定評価に影響しないこと、③授業開始時及び、終了時に依頼した両アンケートの提出先は、

事務室に設置された指定のBOXとし、提出者が明確にならないよう配慮することも説明した。

5. 結 果

アンケート結果は、前期・後期クラスを合わせた回答数を使用する。後期クラスの授業前（Pre-test），授業後（Post-test）におけるアンケート回答の学生数が異なるため、人数とともにパーセンテージを示した。（表3）

Q 1 「あなたは普段小説を読む」の項目では、5（非常に当てはまる）及び4（当てはまる）と答えた学生は、34.9%から31.6%へ減少した。3（どちらともいえない）と答えた学生も20.9%から18.4%へ減少した。一方、1（全く当てはまらない）及び2（あまり当てはまらない）と答えた学生は44.2%から50.0%へ増加した。

Q 2 「小説を読む場合、感情移入をしやすい」の項目では、5（非常に当てはまる）及び4（当てはまる）と答えた学生は、58.1%から71.0%へ増加し、3（どちらともいえ

ない)と回答した18.6%の学生も21.1%へ増加した。しかし、1(全く当てはまらない)及び2(あまり当てはまらない)と回答した学生は、23.3%から7.9%に減少した。

- Q 3「小説を読むことは医療従事者には必要なことだと思う」の項目では、5(非常に当てはまる)及び4(当てはまる)と答えた学生は、48.8%から60.5%へ増加した。3(どちらともいえない)と答えた学生は、37.2%から23.7%へ減少し、1(全く当てはまらない)及び2(あまり当てはまらない)と答えた学生も、14.0%から13.1%へとわずかな減少を示した。
- Q 4「小説以外に絵画や音楽に親しむことも医療従事者には必要なことだと思う」の項目では、5(非常に当てはまる)及び4(当てはまる)と答えた学生は、72.1%から73.6%へわずかな増加を示した。3(どちらともいえない)と答えた学生は、18.6%から15.8%へ減少した。1(全く当てはまらない)及び2(あまり当てはまらない)と答えた学生は、9.3%から10.5%へ増加した。
- Q 5「患者の気持ちをよりよくわかるようになるためには多くの人生経験は必要だと思う」の項目では、全員が5(非常に当てはまる)及び4(当てはまる)に回答した。
- Q 6「小説による疑似体験でも多くの経験は得られると思う」の項目においては、5(非常に当てはまる)及び4(当てはまる)と答えた学生は、74.4%から84.2%へ増加し、3(どちらともいえない)と答えた学生は、23.2%から15.8%へ減少した。1(全く当てはまらない)及び2(あまり当てはまらない)と答えた学生は、2.3%から0%になった。

- Q 7「疑似体験による経験でも、将来患者の気持ちを理解し、うまく対応できるようになるために必要なことだと思う」の項目では5(非常に当てはまる)及び4(当てはまる)と答えた学生は、81.4%から86.8%へ増加し、3(どちらともいえない)と答えた学生は、16.3%から10.5%へ減少した。1(全く当てはまらない)及び2(あまり当てはまらない)と答えた学生は、2.3%から2.6%へわずかに増加した。

6. 考 察

小説を読む習慣(Q 1)に関して、小説を普段から読むとしていた4割弱の学生が、授業後にさらに減少し、「ほとんど読まない」あるいは「全く読まない」とする学生が半数にまで増加したことは、学生の小説を読む機会が少なくなっているという現状が窺える。

それに対して、小説を読む際の感情移入(Q 2)に関しては、授業前より増加し7割程度になっている。このことは、小説を読む機会が減少しているものの、感情移入をしながら読むという行為に対する意識が高められたことを示しているといえる。普段読む小説はほとんど日本語だと思われるが、英語の授業においても、文学教材によって、小説を読む機会を得、その際に感情移入をするという機会を得ることができたことを示唆しているのではない。

一方、少数ではあるが、まったく感情移入に対する意識を向けていない学生もいることにも注目したい。英語で書かれた小説の教材が、学生の感情移入を困難にさせていること、また学生個々の英語の理解度が影響していることなどが原因であると推測できる。

医療者にとって小説を読むことに関する必要性への認識(Q 3)は授業後わずかに増加したものの、全体として5～6割程度である。その一方、

小説以外の他の芸術に親しむことへの必要性 (Q 4) については、授業後わずかな増加にとどまったが、授業前・後ともに全体の 7 割を占めている。このことから、小説の必要性より、他の芸術への必要性を認識している学生が多いことが示された。本研究では、明確な理由は示せないが、小説を読む際には、読書時間の確保、理解力などがさらに重要になることが示されたといえる。

小説を読む際の感情移入 (Q 2) においても、英語による文学作品を読む行為の際に立ちはだかる「英語の理解」という壁が、感情移入ひいては疑似体験に至るまでの過程を困難にさせていると推測されることから、母国語でも敬遠されがちな文学を外国語教育で教材とすることの困難さが、さらに浮き彫りにされたといえる。

医療者としての豊かな人生経験の必要性 (Q 5) に関しては、全員が高い認識を示している。また、小説による疑似体験獲得の可能性 (Q 6) に関しては、7～8 割程度の学生が高い意識を示し、医療者としての疑似体験の必要性 (Q 7) に関しては、授業後にわずかな増加がみられたが、授業前・後ともに 8 割以上の学生が認識していることが確認された。これらわずかな変化が、授業によるものであると明言することはできないが、約 8 割の学生が、小説による疑似体験の獲得の可能性や医療者としての疑似体験の必要性に対して高い意識を示していることが示唆された。

本研究において、最も重要であると思われることは、医療者にとっての小説の必要性に対する認識は、授業後増加するものの、6 割程度であるのに対して、8 割以上の学生が小説による疑似体験の可能性、医療者にとっての小説による疑似体験の必要性及び有用性を認識した点である。このことから、英語講読クラスにおいて扱われた文学作品 (小説) を読む機会を通じて、学習者が疑似体験を得ることに対する認識をさらに高めることができたといえるのではないだろうか。

7. 本研究の限界

本研究は、実験群、統制群を設けて行われた調査ではないこと、対象数が限られており、統計処理を行っていないこと、質問項目に設定されたあいまいな表現により、学生の回答が正確に反映されているとはいえないことなどから、今回得られたアンケート結果を一般化することはできない。また、調査は学生個々の今までの読書習慣や、英語の読解力の差による影響を受けるため、調査結果が本授業によるものであると断言することはできない。

8. おわりに

本研究から、本授業を履修した学生にあっては、医療者としての人生経験の必要性、それを補完するための疑似体験の重要性、そして文学 (小説) による疑似体験獲得の可能性に関して、元来高い意識を備えていたが、さらに授業を通じて高められたことがわかった。文学を教材とする授業は医療系学生にとって疑似体験を得る場としての役割を果たす可能性があることが示唆されたといえる。小説を含む文学教材が、英米の看護・医学教育においても活用されていることを鑑み、学生のこれらの意識の維持、及び向上のために一翼を担えるように、EFL クラスにおいても、文学教材の有意義な活用方法の改善を今後の課題としていく必要があると考える。また、学生の読書の機会が減少している現状を踏まえ、教養科目における英語科目としても、文学教材を使用することによって、読書から得られる疑似体験の機会の提供を継続していく必要と意義も見出されたといえる。

同時に、英語の小説を教材とすることによって生じる課題も浮き彫りにされた。この点に関しては、授業で使用したワークシートの効果や、英語学習の側面からの考察に焦点を当てた授業後に実施されたアンケート結果及び学生による自由記述

の分析を精査し、次の論考に譲りたい。

注) 本稿は、第53回 JACET 大学英語教育学会・国際大会(2014年 8 月28日, 於: 広島市立大学)にて発表した内容に加筆修正を加えたものである。

謝 辞

本研究において、前期の授業(英語Ⅳ)を担当し、教材作成およびアンケート分析に尽力していただいた非常勤講師の宮崎洋子先生に感謝申し上げます。

また、有益なコメントを下さいました査読者の方々に心より御礼申し上げます。

引用文献

- 1) 深山晶子 編 (2000): 「ESP の理論と実践—これで日本の英語教育が変わる」, p.9-12, 三修社, 東京
- 2) 高橋和子 (2009): 「文学と言語教育—英語教育の事例を中心に—」 シリーズ朝倉 <言語の可能性>10 言語と文学, p.152-155, 朝倉書店, 東京
- 3) 江利川春雄 (2004): 「英語教科書から消えた文学」, 『英語教育』大修館書, 53(8): 15
- 4) 前掲書 3), 16
- 5) 前掲書 3), 17
- 6) Carter, R., Long, M.N. (1991): *Teaching Literature*. London: Longman: 1
- 7) 斉藤兆史 (2013): 「新時代の英語教育と文学—本ハンドブックの推薦文に代えて—」 吉村俊子・編, 『文学教材実践ハンドブック—英語教育を活性化する—』, p.6-7, 英宝社, 東京
- 8) Ghosn, I.K. (2003): Socially Responsible Language Teaching Using Literature. *The Language Teacher*, 27(3): 16
- 9) Cheena Fujioka (2012): Implementing Content-Based Peace Education in an EFL Classroom Utilizing Non-Fiction Literature. *JACET Kansai Journal*, 14: 53-64
- 10) Collie, Joanne & Slater, Stephen (1987): *Literature in the Language Classroom: A resource book of ideas and activities*. Cambridge: Cambridge University Press: 6
- 11) 前掲書 6), 3-4
- 12) Lazar, Gillian (1993): *Literature and Language Teaching: A guide for teachers and trainers*. Cambridge: Cambridge University Press: 3
- 13) 鈴木晃仁 (2006): 「医学と英文学—臨床医学の物語的転回」 *The Rising Generation*, Vol. CLII. No.1: 25
- 14) 足立智孝 (2009): 「Medical Humanities 教育について—登場背景と教育内容」 *Bioethics Study Network*, Vol.8, No.1: 12
- 15) 前掲書14), 11
- 16) 前掲書14), 14
- 17) Ubukawa, E., Miyazaki, Y. and Hayashi, N. (2013): A Study on Nursing Articles on Literature-Based Education in Both the US and UK. *Bulletin of Gunma Prefectural College of Health Sciences*, Vol.8: 47
- 18) Darbyshire, P. (1994): “Understanding caring through arts and humanities: a medical/nursing humanities approach to promoting alternative experiences of thinking and learning” *Journal of Advanced Nursing*; 19: 856
- 19) Darbyshire, P. (1995): Lessons from Literature: Caring, Interpretation, and Dialogue *Journal of Nursing Education*; 34(5): 216
- 20) Holdsworth, J.N. (1968): Vicarious Experience of Reading a Book in Changing Students' Attitudes *Nursing Research*; 17(2):

135-139

21) 前掲書17), 56-57

22) 前掲書 1), 10

23) 椋平 淳・野口ジュディー・深山晶子(2003) : 「文学系 ESP は可能か?—「EGP」対「ESP」の構図を超えて」(Is there an ESP approach for teaching literature?: Looking beyond ESP vs. EGP). *JACET* 関西紀要第 7 号 : 107

24) 川越栄子(2005) : 医療系大学生のための英語教育における ESP 医学部・看護学部における ESP 教育の実態と将来像の系統的研究 (A Systematic Study of Actual Conditions and the Future: A Survey of ESP Education in Medical Schools and Nursing Schools) 平成14年度～16年度科学研究費補助金 (基盤研究(C)) 研究, 研究成果報告書 : 19

25) 前掲書24), 57

26) 長坂香織, 他 (2006) : 「看護師・助産師・保健師の職場における英語のニーズ分析 (Survey on the Nurses' Needs for English in Clinical,

Maternity and Community Health Nursing, *Annual Report of JACET-SIG on ESP* Vol. 8 : 21

27) 前掲書23), 110

28) 前掲書23), 113

29) Hirvela, A. (1990): ESP and Literature: A Reassessment, *English for Specific Purposes*, Vol. 9: 243

30) 前掲書29), 243

31) Albom, Mitch (1997): *Tuesdays with Morrie : an old man, a young man, and life's greatest lesson*. New York: Broadway Books

32) 前掲書10), 6

33) Albom, Mitch (2005): *Tuesdays with Morrie An old man, a young man, and life's greatest lesson*, 『モーリー先生との火曜日』講談社文庫, 東京

34) ミッチ・アルボム 著・別宮貞徳訳 (2004) : 『モーリー先生との火曜日』, NHK 出版, 東京

35) 前掲書10), 11

資料 1 : Worksheets

資料 1－1 : Q & A

1. *Tuesdays with Morrie* The Curriculum (p.1~p.4)

I. Reading comprehension : Answer the following questions in Japanese.

Q1. Where did Morrie and Mitch have the class?

Q2. When did they have the class?

Q3. What was the subject?

Q4. Write what the student was required to do.

a.

b.

c.

d.

Q5. What do you think Morrie is like?

Q6. What does Morrie look like?

資料 1－2 : チャート

2. *Tuesdays with Morrie* The Syllabus (p.5~p.13) 'living funeral'

I. Reading comprehension : Complete Morrie's Medical History in Japanese.

When	What happened	What he thought / felt	How you think he felt

Notes:

death sentence: 死の宣告 boom : ぶんぶん鳴る

Lindy: リンディー, 動きの激しいジルバダンス。1930 年代, ニューヨークのハーレムに起こったベアで踊るダンスで, 1980 年代に再流行。

Jimi Hendrix (1942-70): ジミー・ヘンドリックス, アメリカのロックギタリスト

like a conductor on amphetamines: アンフェタミン (覚せい剤) 中毒の指揮者のように doctor of sociology: 社会学博士

layer on layer: 年輪を重ね zap: 電流を流す theology: 神学 sequoia: セコイア (すざきの世界三大巨木の一つ)

資料 1 — 3

II. Grammar & Phrases

Focus on the underlined parts, and translate the following English sentences into Japanese.

1. He used to go to this church in Harvard Square every Wednesday night for something called "Dance Free." (p.5.10)

2. Morrie would wander in among the mostly student crowd, wearing a white T-shirt and black sweatpants and a towel around his neck, and whatever music was playing, that's the music to which he danced. (p.5.12)

3. One day he was walking along the Charles River, and a cold burst of wind left him choking for air. (p.6.10)

4. Morrie, who was always more in touch with his insides than the rest of us, knew something else was wrong. (p.6.20)

5. My old professor, meanwhile, was stunned by the normalcy of the day around him. (p.8.9)

6. He would not be ashamed of dying. (p.10.18)

7. Each of them spoke and paid tribute to my old professor. (p.12.24)

8. In fact, the most unusual part of his life was about to unfold. (p.13.10)

資料 1 — 5

IV. Activity:

(1) Let's do research on ALS, and find answers to the following questions. Write them in Japanese.

*What does ALS stand for?

*What is its Japanese name?

*What is the symptom of ALS?

*What is the process of ALS?

(2) How does Mitch explain about ALS?

資料 1 — 4

III. Vocabulary

Choose the appropriate words from the box below to complete each sentence.

Make necessary changes.

1. The music didn't ().

2. Our house is very ().

3. We spent two () weeks away from work.

4. Wealth is not necessarily () with happiness.

5. We were () by the news of the 3.11 Tohoku Earthquake.

6. He had a () effect on my life.

7. I have deep () for the starving children in Africa.

8. President Obama delivered a () speech.

9. They showed () sympathy to the children with difficult diseases.

10. If you were () down to the size of an ant, what would you do?

stun, profound, matter, blissful, sympathy,

synonymous, heartfelt, rousing, shrink, prominent

Potentials of Literature in an EFL Reading Classroom for In-Training Healthcare Professionals

— A Case Study of Using *Tuesdays with Morrie* (1997) —

Emiko Ubukawa

Gunma Prefectural College of Health Sciences

Objectives: The aim of this study was to prove the appropriateness of using medically-themed literature in the English as a foreign language (EFL) reading classroom for future healthcare professionals.

Methods: In the EFL reading classroom, the students were required to read a medically-themed novel (*Tuesdays with Morrie*, 1997), use worksheets created by teachers, and answer a questionnaire. The questionnaire measured their attitudes toward literature as a resource for vicarious experiences and the necessity of experiencing a wide range of situations to prepare for their future professions, even if such situations are experienced vicariously. By analyzing the results of the questionnaires, we clarified the appropriateness of using a medically-themed novel in the EFL reading classroom for future healthcare professionals.

Results: After the EFL class, the students showed positive changes in their attitudes toward literature as a resource for gaining vicarious experiences and toward the necessity of vicarious experiences for in-training healthcare professionals.

Conclusions: Using a medically-themed novel in the EFL reading classroom could help in-training healthcare professionals to become fully aware of the benefits of reading literature to vicariously experience various situations in order to understand a variety of people in clinical settings. Literature has the potential to help Japanese in-training healthcare professionals change their attitudes toward literature as a resource for gaining vicarious experiences and toward the necessity of vicarious experiences for in-training healthcare professionals. In order to further enhance the attitudes of future healthcare professionals, it is necessary to improve the usage of literature in the EFL classroom.

Key words: in-training healthcare professionals, literature,
EFL reading classroom, vicarious experience